26PB-am291

患者とのコミュニケーションスキル向上に対する実務実習事前学習の効果

○浦山 由衣[1], Denise A. EPP[1,2], 小林 大介[1], 窪田 敏夫[1], 岸本 淳司[3], 吉田 素文[4], 島添 隆雄[1]（[1]九大院薬，[2]第一薬大，[3]九大院医，[4]国際医福大院医福）

【目的】2006 年度より 6 年制薬学教育が開始され、モデルコアカリキュラムにはコミュニケーションに関する到達目標が組み込まれた。改訂コアカリキュラムではコミュニケーション教育がさらに重視されており、2018 年度には改訂コアカリキュラムに基づく実務実習事前学習を実施する必要がある。本研究では現在の教育効果を評価することを目的として、薬局実務実習で必要な患者とのコミュニケーションスキルに関する自己評価アンケートを実務実習事前学習前後で比較した。

【方法】事前学習前後にアンケートに回答した 2015 年度の第一薬科大学 4 年生 61 名を対象とした。回答は 5 段階評価、質問項目は 24 項目とした。事前学習前の質問項目の因子構造を明らかにするために因子分析を行った。事前学習前後の因子別得点・項目別得点の平均値を比較した。

【結果・考察】因子分析により 3 因子 19 項目（累積寄与率 56.39%）が抽出された。それぞれの因子を構成する質問項目をもとに、因子 1 を「説明・応答スキル」、因子 2 を「コミュニケーションスキル」、因子 3 を「質問・確認スキル」と命名した。「説明・応答スキル」の因子別得点が事前学習後に有意に上昇したことから、現在の事前学習は薬学的な知識を説明・応答する技能を習得する点において有用であることが示唆された。一方、「コミュニケーションスキル」「質問・確認スキル」において有意な変化は認められなかったが、事前学習前の自己評価が高い項目があり、そのため事前学習の効果が見られなかった可能性が考えられる。よって、自己評価の得点が低く、事前学習により上昇しなかった項目、「患者の服薬を動機づける」「治療における患者の経過をほめる」などの患者を支援するようなより深いコミュニケーションについて、今後重点的に指導の充実を図っていく必要がある。